

第一章

「——久しぶりだね」

深海みたいに青く染め上げられた部屋で、灰色がかった切れ長の瞳がすつと細められる。十数年ぶりに逢った彼は、仕立ての良さそうなダークブラウンのスーツを身につけ、艶のある濡れ羽色の髪を綺麗に撫でつけた紳士になっていて。整った顔立ちは見とれてしまうほどに美しくて。

「……君を見つけられて、良かった」

熱っぽい瞳に見つめられて、胸が高鳴る。

——でも。

（どうして……よりによつてこんなところで……）

——ここはランジェリーパブ。

私はキャストで、彼はVIPのお客様。

初恋の人との再会なのに、恥ずかしさといったたまれなさで顔を上げられない。運命の残酷ないたずらに、私は苦い想いを噛みしめてうつむくしかなかった。

（こ、こんな恥ずかしい格好するなんて……）

胸が大きく開き、肩から谷間が剥き出しの黒いスリップ。ふんだんにレースをあしらったブラのお陰で胸こそ隠れているものの、オーガンジー素材のそれは、腰から下は肌が薄く透けて見える。

これが今日から私の仕事着なのだ。

「うん、俺の見立て通り。その衣装、【ヒナ】ちゃんによく似合ってるよ」

支配人さんの目には値踏みするような色が浮かんでいて、思わず身を硬くしてしまう。

そんな私に気づいたのか、支配人さんは励ますようにポンポンと私の肩を叩いた。

「緊張してるのかな？ そんなにガチガチにならなくても大丈夫だよ。スマイルスマイル」

「は、はい……」

そう言われても、すぐに緊張が解けるはずもなく。浮かべた笑顔が引きつってしまう。
（うう、私、ここでやっていけるのかな……）

——ここはランジェリーパブ。【ヒナ】というのは私の源氏名だ。といっても、本名が陽奈だからほぼ変わらないんだけど。

キャストはランジェリーを着用し、接客するシステムだ。

基本的に脱ぐのやお触りは禁止。普通のキャバクラのように、お客さんについてお酒を

作ったり、話をするだけだと言われたので、この仕事をすることに決めたのだけれど。

(やつぱり……こんな格好で人前に出るの恥ずかしい……)

そもそもなぜこんな仕事をしようと思ったのかというと、両親が借金の保証人になっていた親戚が、事業に失敗して雲隠れしてしまったからだ。

自動的に負債は両親が背負うことになってしまった。

事業資金と言うこともあり、借金かなりかさんでおり、両親だけではとても返済できそうにない。

「陽奈は心配しないでいいよ」

なんて、父と母は言ってくれたけれど、私も力になりたい。

でも、勤めている会社の給料だけでは、到底足りない。

そんな時にたまたまスカウトされたのが、このランジェリーパブだったのだ。

私は胸とお尻が大きいのがコンプレックスで、よくナンパに遭ったりすれ違う男性にジロジロ見られるのがイヤで、身体のラインを隠すようなゆつたりした服を着ているのだけだ。

それでもしょっちゅう、キャバクラや風俗のスカウトに遭ってしまう。

いつもなら早足で振り切るのだけれど、借金のことが頭をよぎって、つい足を止めてしまった。

私が興味を持ったと気づいたスカウトの人が、早口でまくしたてる。

「ウチは脱ぐのもナシ、お触りもナシ！ お客さんと楽しくお酒を飲んでるだけでバンバン稼げちゃう！ お姉さんなら、あつという間にナンバーワンになれちゃうよ！」

なんてスカウトの人の言葉に乗せられ、あつという間に面接を受けることになってしまった。

面接してくれた支配人さんは「君なら即採用だよ！ いつから入れる？」とかなり乗り気だった。

初めは迷っていたけれど、提示された時給がかなり良いことが決め手になった。

週末だけでもアルバイトに入れば、借金返済の足しになるかもしれない。

そう思い、働くことを決意したのだった。

「で、早速なんだけど、もう君に本指名が入ってるんだ。しかも、VIPルーム！」

嬉しそうに言う支配人さんの言葉に耳を疑う。今日は初日だから、研修がてら他のキャストさんにサブとしてつくものだろうと思っていたのに。

「いやーすごいね。初日でいきなりそんな太客取れるなんて、うちの店始まって以来の快挙だよ」

「あ、あの。VIPルームって、何をすれば」

「大丈夫大丈夫。お客さんの言う事に従ってればいから。さあ、そろそろ時間だよ。部屋

まで案内するからついてきて」

「ご機嫌な様子で歩く支配人さんの後ろを、おずおずとついていく。

（まだ、フロアに出てもいないのに本指名なんて……一体どんな人なんだろう？）

「失礼します。ご指名の【ヒナ】ちゃん、お連れしました」

支配人さんがVIPルームのドアを開け、中で待っているお客さんへ声をかける。

「さあ、【ヒナ】ちゃん、お客様にご挨拶して」

支配人さんに背中を押され、お客様の前へ出る。

深いブルーの照明に染められた部屋の中、仕立ての良いスーツを着た若い男性が、ゆつたりとソファーに座っていた。

「は、はじめまして……【ヒナ】です。どうぞよろしく願います」

「こちらこそ、よろしく」

薄暗い照明の中では顔はよく見えないけれど、穏やかで優しいような声にホッとす。

（なんだかこの人、どこかであったような……気のせいかな？）

「では、私はこれで。ごゆっくりお楽しみください」

支配人さんはそう言うのと、部屋を出て行った。

「……久しぶりだね」

男性は、私を見て懐かしそうに目を細める。

「あ、あの……私、あなたにどこかでお会いしたことがあるんでしょうか？」

「やつぱり、覚えてないのか。まあ最後に会ったのが小学生の時だから仕方ないか」

彼はそう言うとしどしど寂しそうに笑う。

「小鳥遊颯馬。この名前に聞き覚えは無いかな？」

「……！ 颯馬くん!？」

思わず、すつとんきような声を上げてしまった。

小鳥遊颯馬くんは、小さい頃、私の家の近所に住んでいた一つ上の幼馴染みだ。

確か、お父さんが大きな会社の社長さんで、近所でも有名な豪邸に住んでいたことを覚えてる。

でもご両親はとても忙しいらしく、彼はいつも一人でポツンと公園でブランコをこいでいた。

そんな寂しそうな彼を放って置けなくて、声をかけて一緒に遊ぶようになった。

そのうち、家にも遊びに来るようになって、両親は実の息子のように颯馬くんを可愛がった。

晩御飯と一緒に食べて、ゲームをしたり、テレビを見たり。ときには家族でトランプをした。

まるで実の兄妹のように私たちは育った。

けれど、颯馬くんは全寮制の中学に入ることになり、それから連絡が途絶えてしまったのだ。

「ここ、座りなよ」

颯馬くんがボンボンと、自分の隣を手で叩く。

「し、失礼します」

「敬語はなしで。昔みたいに話してよ。せつかくのVIPルームなんだし」

「う、うん……」

おずおずと彼の隣に座る。

暗く沈んだ青の中、間接照明に照らされる彼の顔は、まるで絵画のような神々しさすらある。

きめ細かな、陶器のように滑らかな肌。

灰色がかった切れ長の瞳。まぶたを縁取る長く濃いまつげは、まるで絵筆で描いたように完璧なカーブを描いている。

身体の線に沿うように詠えられたであろうスーツは、しなやかな彼の身体のラインを更に美しく引き立てていて。

まるで完成された芸術品のようなだ。

（子供の頃から綺麗な顔してるなと思ってたけど……ここまで完璧だと圧倒されちゃう

な

「キャストの写真を見て驚いたよ。まさかこんなところで君に会えるなんてね」

「わ、私も……よく、顔が分かったね」

「ふふ。面影があつたからね。ずっと、連絡出来なくてごめん。僕が通つた学校、家族以外との連絡が禁止で……携帯も、ろくに使わせてもらえなくて。何度か手紙を出したんだけど、宛先不明で返つてきちゃったんだ」

「うちも、あの後引つ越しちゃったから……連絡先伝えたかつたんだけど……」

「……そつか。でも、やつと君を見つけられて、良かった」

颯馬くんは懐かしそうに目を細めるけれど。

私は笑つてうなずくことができなかった。

（こんなところで再会……したくなかった）

ぎゅつとスリッパの裾を握り締める。

私にとつて、彼は初恋の人だった。

喜ぶべき再会なのに、なんだか自分が惨めになつてきて、恥ずかしくていたたまれなくて。

できることなら、今すぐここから逃げ出したい。

うつむいたままの私へ、颯馬くんがスーツのジャケットを脱いで、そつと私を差し出し

た。

「これ……羽織る？」

「えっ、あ、あの……」

「なんだか寒そうだなと思つて。帰るときに返してくれたらいいから」

「あ、ありがとう……」

ずっとジャケットを受け取り肩に羽織ると、僅かな重みに守られているようで安堵する。
(氣遣つて……くれたのかな)

「颯馬くんは、どうしてここに……？」

「接待でたまに、この店へくるんだよ。取引先の人がお氣に入りだね」

「そうなんだ……えっと、何か飲む？」

「そうだね。ロマネコンティにしようかな。君も一緒に飲もうよ」

渡したメニューをパラパラとめくり、颯馬くんが言う。

(ロマネコンティって、かなり高級なワインだよね……!?)

「えっ、そ、そんな、いいよ！」

「もしかして、ワイン苦手？」

「そうじゃないけど。た、高いし……」

「そんなの気にしないで。グラスなら大した金額じゃないから」

さらつと言うけれど、グラス一杯でも私にとつては高額であろうことは察せられる。

（子供の頃は、なんとなくお金持ちなんだなって思ってたけど……颯馬くん、大企業の御曹司だもんね）

子供の時は、なんとなくお金もちの家の子なんだな、としか認識していなかったけれど、大人になってから、颯馬くんが日本有数の財閥系企業、小鳥遊グループの次期会長だと知った。

つくづく、自分との身分の差に圧倒されてしまう。私とは全然違う世界の人なんだ。ほどなくして、オーダーしたロマネコンティと二人分のグラスをボーイさんが持つて来てくれる。

「わ、私が注ぐね」

よく冷やしたグラスに、おぼつかない手つきでロマネコンティを注ぐ。こつくりとした真紅の液体が、グラスを満たしてゆく。

ワインを注ぎ終えると、颯馬くんがグラスを掲げて微笑んだ。

「久しぶりの再会に、乾杯」

「か、乾杯……」

カチン、と軽くグラスのふちを合わせると、小気味よい音が響く。

颯馬くんはグラスに口をつけ、ワインを口に含む。

「うん、美味しい。これは……2010年のものかな」

「えっ、そんなことまで分かるの？」

「うん、だいたいだけだね。僕、ワインは結構好きだから。そんなことより……」

颯馬くんはグラスをテーブルに置き、氣遣うように私を見た。

「どうして、こんなところに？」

「……………実は——」

かいつまんで事情を話すと、颯馬くんが顔を曇らせて呟く。

「……そっか。おじさんとおばさんが……」

「心配しなくてもいいって言われたんだけど。とてもふたりじゃ返せる額じゃないから

……あの、お父さんとお母さんには、ここで働いてることは——」

「勿論、言わないよ。僕に出来る事があれば、力になるよ」

「ありがとう。でも、これは家族の問題だから」

「……僕は、おじさんとおばさんを本当の家族のように思ってるんだけどな。もちろん、君も」

彼が私の手をそつと握りしめる。大きな手の平から伝わる体温で、ゆつくりと身体の強
ばりがほぐされていくようだ。

「……でも、この店がどんなところか君は……ちゃんと知ってるの？」

「え……？ えっと、支配人さんには、お客さんと話をしたり、一緒にお酒を飲んだりする仕事だつて説明されたけど」

「……なるほどね。でも、それだけじゃないんだよ。陽奈は何も知らないみたいだから、僕が教えてあげる」

不意に、腰を掴んで抱き上げられる。

「きゃ……っ!？」

次の瞬間には、私は向かい合わせになる形で、彼の膝の上へ座っていた。

「そ、颯馬くん、なんでこんな……っ」

「ほんとなら、キャストはここに座るのが決まりだつて聞いてたんだけどな」

「そ、そんなの知らない……!」

「じゃあ、覚えておかないとね……っって言っても、僕以外には指名なんてさせないけど」
「ぼそり、と彼が何か呟いたような気がしたけれど、よく聞き取れない。」

「あの、今なんて……？」

「ん？ なんでもないよ。それより……他には何か聞いてないの？ VIPルームは特別なルールがあるはずなんだけど」

「支配人さんは……お客様の言うことに従っていれば、大丈夫だつて」

「ある意味間違つてないけど、ずいぶん不親切だな。VIPルームはね……キャストとよ

り深く触れ合うことが出来るよう、用意された部屋なんだよ」

「……それって、どういう……」

颯馬くんが私の肩を抱き寄せ、頬に手を添える。

「……こういう、意味」

彼の顔がゆつくりと近づき——柔らかいものが唇へ降りてくる。

「……♡ んっ♡ううっ♡」

私の唇の輪郭をなぞるように、彼の唇が何度もちゅ、ちゅつと吸い付く。

ロマネコンティの芳醇な香りが、鼻腔に流れ込んでくる。

（そ、颯馬くんとキス……しちゃった……♡）

軽く口づけられただけなのに。頭がぼうつとしてきて、思考が白く霞んでいく。

ちゅ……♡ちゅ♡はむう……♡

颯馬くんが、私の下唇を軽く食んで左右に動かす。

全身がカアツと熱くなって、身体から力が抜けてしまう。

（どうしよう♡軽くキス、されただけなのに……♡動けない……!）

颯馬くんが心配そうに、トロンとした私の顔をのぞき込んだ。

「ごめん……ちよつと……やりすぎたかな」

「ううん……。大丈夫……ちよつと、びっくりしただけ」

「ホントに？」

真つ赤になつてこくと頷くと、颯馬くんが私の頬をそつと撫でた。

「可愛い……」

頬に添えられた指が輪郭をたどり、首すじをなぞつて鎖骨へ降りる。

「そんな顔されたら、もつと……触りたくなる」

黙つてされるがままになっていると、確かめるように颯馬くんが囁く。

「もし、イヤならちゃんと断つてもいいんだよ？　じゃないと……もつとえつちなこと、されちゃうからね？」

彼の指が胸元へ伸び、スリップ越しにすり♡と触れる。

「……っ♡」

かすかに触れただけなのに、反射的に肩がびくつと震えてしまった。

「……怖い？」

「……違う、の。こういうの初めてだから、慣れてなくて……っ」

「この店では初めてつてこと？　それとも——」

颯馬くんの指がかり、と乳首を引つ搔く。

「男に触られるのが初めて……つて意味？」

かりかり♡と下着越しに乳房の突起を優しく引つかかれて、甘い吐息が漏れてしまう。

「ね……答えて？」

追い討ちみたいのに、きゅ♡と乳首を摘ままれる。私が答える余裕をなくしているの分かっているくせに。

「……ん……う♡両方、だよ……っ♡」

「……僕以外とはしたこと、ないんだ？」

「今まで……誰とも付き合った事、ない……から……っ♡はあっ……」

「嬉しいな。陽奈の初めてに、僕がなれたんだね。もつとたくさん、気持ちいいこと教えてあげる」

剥き出しの胸の谷間に指を挟むように押し込まれる。

そのままスリップの胸当てをずりさげられると、ぶるんと乳房が揺れて露わになった。

「あ……っ♡」

「何もつけてないなんて、無防備すぎるな。こうやって、すぐに脱がされちゃうよ？」

「う……だ、だって……知らなかった……から……っ♡」

吐息がかかるほどに近い距離で、おっぱいをまじまじと見られてしまう。

熱い視線が注がれ、うなじや耳たぶが赤く火照ってゆくのを感じる。

咄嗟に、腕でさっと胸元を隠してしまった。

「どうして隠すの？」

「だ、だって恥ずかしい、し……」

「照れてるんだ？ 可愛いな。でも……ダメだよ？ もっとよく見せて？」

颯馬くんが胸を覆っている私の腕に手をかけ、ゆつくりと左右に開かせる。

「あ……っ♡やああ……♡」

私の手首を掴んだまま、颯馬くんが乳房に顔を寄せる。

「陽奈のおっぱい、大きくてツンと上向きで……すごく、綺麗だ」

ちゅ、ちゅつと首筋や鎖骨にキスを落とされ、唇が乳房まで降りてくる。

そのまま柔らかく乳輪を辿られ、胸がかあつと熱くなった。

「や……だあ……♡ 颯馬、くん……♡ やめ……て……♡」

「……ほんとに、やめて欲しい？」

「だ……っつ♡こんなところ、でっ♡」

「じゃあ、どこならいいの？」

「そういう問題じゃ……ふあ♡」

れろり♡と舌が乳首の根元を捉えて舐め上げる。

「っ♡」

「ふふ、感じやすいんだね、陽奈は。腰、くねってるよ？」

「だって……っ♡それは……っ♡颯馬くんがあ……♡」

「僕が……何？　ちゃんとやって？」

「ひゃ……ああ♡いじわる、しないでっ……♡」

「答えるまで、やめないよ」

ちゅうううう♡♡

軽く歯を立てて乳首を吸われ、舌先で乳輪をく♡と押し込まれる。

甘い刺激が胸いっぱい広がって、頭がぼうつとして何も考えられない。

「だ……めえ……♡外に、聞こえちゃう、からあ……♡」

「大丈夫。誰も聞いてないよ。……それに、ここはそういう店だから。みんなきつと、陽奈と同じ事されてる」

「そ……んな……♡あ……あっ♡」

ちゅうう♡ちゅば♡ちゅば♡

片方の乳房をやわやわと揉みしだきながら、時折乳首をぴん♡と爪で弾いたり、指腹で押し潰して転がされて。

もう片方の乳首は、唾液をたっぷり♡とまぶされちゅうちゅうと唇で食まれ、吸い付かれる。

ちゅばちゅば♡れろろ♡ぬるっ♡れろお♡

ぴんっ♡かりかり、すりすり♡くに♡くに♡

舌でねぶられ、指で弾かれ、摘まれ、またぶられて。

同時に異なる刺激を絶えず与えられ、ジンジンと下腹部が熱くなっていく。

（おっぱい♡吸われてるだけなのに……♡なんでこんなに……♡お腹、熱くなっちゃうの……♡）

どうにか熱を逃がそうと、もじもじと内ももを擦り合わせる。

けれど、その程度ではもう発散出来ない。

胸に集まる淫らな熱は、出口を求めて身体の中を駆け巡っている。

「も……やめ……♡ 颯馬、くん……♡これ以上は、私……♡」

「おっぱいだけじゃ、物足りなくってきた？」

颯馬くんの指先が肋骨から腰のくびれをたどり、スリップの裾をめくりあげてショーツの上へと降りる。

「……♡そ、そこは……♡」

「……これ、おまんこしか隠れてないんだ。えっちな下着着けてるね」

剥き出しになった太ももの付け根を撫でて、颯馬くんが耳元で低く囁く。紐で結び合わされただけのショーツは、下着と呼ぶにはあまりにも頼りなさ過ぎる。

「こ、これしか貸して貰えなくて……♡」

「本当に……陽奈は何も知らないでここに来たんだね。危なっかしいなあ。僕が指名しな

かったら、知らない男に触られ放題だったんじゃない？」

指先が恥丘をたどり、割れ目をすりっ♡と擦る。

「そ、そこは……っ♡だ、ダメえ……♡」

「さっきからダメダメ言ってるけど、本当にイヤなら振りほどいてもいいんだよ？」

颯馬くんの手が、ショーツごしに割れ目をゆつくりと往復する。

じわ……♡と下腹部が火照って、淫裂から蜜が滲み出てくる。

（どうしよう……私、颯馬くんに触られて……気持ちいいって、思っちゃってる……♡）

颯馬くんは、私にここでの作法を教えてください。

他のお客さんとこんなことするなんて、想像するだけで怖くてたまらない。

『練習』として、ちゃんと断るべきじゃないか。

そう思うのに。

（もつと……して欲しい……♡）

心の声を代弁するかのように、無意識に腰が突き出て小刻みに揺れてしまう。

それを敏感に感じ取った颯馬くんは、染み出た愛蜜で湿った指先を、すりっ♡と肉芽へ

擦りつけた。

「……ひ……っ♡」

「下着の上からでも、クリトリスが膨らんでるの、はつきり分かるね」

「や……♡ああ……♡こすっちゃ、だめ……♡」

拒絶の意思を示そうと、首を「いやいや」と横に振るけれど。

あまりにも弱々しいそれは、更に与えられる快感の前にあっけなくかき消えてしまう。

ちゅ……♡ちゅ……♡

かりかり♡すりすり♡

首すじにキスを落とされながら、ツンと尖った肉芽の先端をびん♡と弾かれると、甘い愉悦が一気に弾けた。

「んう♡あ……♡はう……♡っ♡」

「もうこんなにあっつき♡クリトリス勃起させて……ほんとにいやらしいね、陽奈は。もしかして触られるの期待してた？」

吐息が耳朶を震わせて、うなじがぞくぞく♡と波打つ。

「ちが……♡ああ……♡や……♡あ……♡ふあ……♡っ♡」

「ほら、イヤならちゃんと振りほどかないと。おっぱいも一緒に虐められちゃうよ？」
れろり♡と乳頭を舌でほじられ、つつん♡と突かれる。

乳首を舐め回されながら、甘やかすようにかりっ♡かりっ♡とクリトリスを何度も指で引っかけて。

布越しの刺激がもどかしくて、お尻をもぞもぞと動かしてしまふ。

（やだ……っ♡颯馬くんの前で、裸みたいな格好になってっ♡おっぱいとクリ弄られてっ♡恥ずかしいのに……やめられないよぉ……♡）

「腰、いやらしく動いてるね。自分から気持ちいいとこに当てようとしてるの？」

「だって……クリ♡カリカリ、されると……変な、気分になって……っ♡あ……はあっ……♡♡」

「陽奈はクリイキの才能ありそうだね。僕がっぱい虐めてあげる」

くにくにっ♡

ショーツごと肉芽を押し潰され、こね回されて太ももの付け根が愉悦でびくびくっ♡と引きつる。

愛しげに、ぴちやぴちやと淫らな水音をたてて乳房を撫でる舌使いが、更に火照りを加速させて。

もう、彼の手を振りほどくなんて出来ない。

（頭の中が♡気持ちいいでいっぱい♡こんなっ♡クリ♡可愛がられてっ♡よしよしされてたらっ♡もっとして欲しくなっちゃうよぉ……♡♡♡）

「そんなにトロンとした目で見つめてくるなんて……誘惑してる？」

「して……ない……けど……♡もお、気持ちよすぎて♡わけ、分かんないよぉ……♡」

「陽奈は快感に弱すぎるよ。それにそんなえっちな顔を晒したら、好きにしてくださいっ

て言ってるようなもんじゃない。お客さんにオモチャにされたらどうするの？」

「そんな……こと、言われても……あっ♡♡ふうふうんっ♡♡」

ちゅこちゅこ♡すりすり♡

ショーツごと屹立した肉芽を摘まれ、軽く抜きあげられる。

勝手に腰が跳ねて、颯馬くんの指の動きに合わせてピストンするみたいに揺れてしまう。

「ほら、もう腰こんなにヘコつかせて。誰でもこんな風におねだりしちゃうんじゃない

？」

「しないっ♡しないからあ……♡もお許してえ……♡♡」

「だーめ。罰としてイクまでやめないから」

（私っ♡こないやらしかったなんて♡どうしよう♡颯馬くんにつ♡軽蔑されちゃう……

♡♡

しこしこしこ♡ちゅこちゅこ♡ぐに♡ぐりぐりいっ♡

かりっ♡と乳首に歯を立てられながら、ぐにぐに♡と強く陰核を指腹で押し潰され、揉みしだきながらこね回される。

「ひ……♡ああ♡ああ♡だめ♡クリこねこねだめええ♡♡びりびりくるっ♡もっつつ♡わけわかんなくなっちゃうからああ♡」

最後の止めとばかりに、ぎゅうっ♡と陰核を押し潰されて――

ぞわぞわ♡と痺れるような快感が、お腹の底から一気に駆け上ってゆく。

「……っ♡だめえ♡これだめっ♡イクっ♡ほんとにイ……♡あああああゝ♡」

ぱちんと目の前で火花が弾け、気づけば私は喉をひきつらせてびくびくっ♡と全身をわななかせていた。

「……っ……はーっ♡はーっ♡はーっ♡」

(イっちゃった……♡颯馬くんの指で♡初めてっ♡クリイキしちゃった……♡)

颯馬くんの首にぎゅううっとしがみつки、浅い呼吸を繰り返す。

股間を覆っているだけの小さな布では受け止めきれないほどの愛蜜が、とぶつと秘裂から漏れ出てきた。

「……っ！ あ、ご、ごめんなさい！ 服、汚れちゃったかも……！」

「全然大丈夫、気にしないで」

颯馬くんは優しく微笑むと、私の髪をそつと撫でてぎゅつと抱き寄せた。

「陽奈と……また会えてうれしかった」

はにかんだ笑顔は、幼い頃と変わってなくて。

胸がぎゅつ、と締め付けられる。

「ね、しばらくこうしてもいい？」

「ん……」

スーツ越しに伝わる、彼の体温。

私を抱きしめる、力強い腕。

耳にかかる熱い吐息。

彼が大人の男性なのだと改めて意識させられ、胸の鼓動が早くなってしまう。

(……ドキドキしてるの、バレちゃってるかな)

その瞬間――

ヴヴヴヴッ！

颯馬くんは胸ポケットに入っていたスマホが震える音が部屋に響いた。

「……もう、こんな時間か。ごめんね、そろそろ僕はいいかないと」

「あ……うん」

「ね、連絡先交換しようよ。次も指名させて欲しいし。出勤する日は教えて」

こくこくと頷き、互いのスマホで連絡先を交換する。

「じゃあ、僕はそろそろ行くよ。支配人には伝えておくから、君はもうあがつて」

「え……あ、あの……」

「またね」

颯馬くんは軽く手を上げると、部屋を出て行った。

(……夢みたい。また颯馬くんと会えるなんて)

彼との時間を反芻するように、そつと胸元や唇に触れる。
しばらく私はそうして、ひとり甘い想い出に浸っていた。

——退勤後。颯馬くんがロマネコンティのボトルを入れてくれたことを支配人さんから知らされた。

店が始まって以来の快拳だと、満面の笑みで褒め称えられてむずがゆくなる。

「ボーナスも弾んどいたから」と支配人さんから渡されたお給料の封筒はずつしりと重くて。

これも夢なんじゃないかと、頬をつねってしまった。